

果は、パソコンとその専用のソフトがあれば誰でも（日本からでも）入手可能となっている。このようなシステムの構築に産・学・官が一体となって進めていることに強い印象を受けた。

ワークショップの毎日は非常に充実したものであった。日程は米国側によって作成されたが、参加者

一同、米国の組織委員会、特に米国側コンタクトパーソンの佐々木嘉和オクラホマ大学名誉教授に深い感謝の念をもって帰国の途についた。なお、発表された論文、共同研究課題等からなる報告書が本年3月に印刷される予定になっている。

（気圏・水圏地球科学技術研究所－米谷恒春）

国際雪科学研究集会（International Snow Science Workshop）'94に参加して

標記の研究集会が、1994年10月30日から11月3日までの間、米国ユタ州スノーバードで開催されました。筆者はこれに参加する機会を得たので、その概要を紹介します。

この研究集会は2年に1度北米で開かれ、今回で8度目です。参加者は米国、カナダの人が大半を占めますが、ノルウェー、スイス、ロシアなどヨーロッパ諸国からも参加がありました。総参加者数はおよそ400人で、これまでに比べかなり増加したとのことでした。日本からは長岡雪氷防災実験研究所の中村所長、新庄雪氷防災研究支所の阿部主任研究官と佐藤篤司主任研究官（米国滞在中）をはじめ10数人が参加しました。

研究発表は2つの口頭発表会場と1つのポスター発表会場で行われました。口頭発表の時間は1件あたり30分で、質疑応答も活発に行われていました。研究対象は積雪と雪崩が主ですが、内容は理学的なものから工学的なもの、スキー場や道路の雪崩対策などの実務的なもの、社会問題や教育までと幅が広いのが特徴です。セッション名（発表件数）を以下に記します。

General Session (12)

Snowpack Properties (6)

Blowing and Drifting Snow (6)

Avalanche Hazard forecasting (6)

Snow in Motion (6)

Policy, Litigation and the Human Experience (6)

Avalanche Warning and Education (6)

Avalanche Hazard Forecasting and Reduction (6)

Control Methods (7)

Poster Presentation (13)

Commercial Exhibits (12)

印象に残った発表はモンタナ州立大学のDent博士と米国寒地工学研究所のLang博士のものです。両

者はそれぞれ天然の雪崩の観測およびモデル物質を用いた室内実験により雪崩の構造の研究を進めていて、ともにビデオ映像を交えながら口頭発表を行いました。筆者はピンポン球を用いた雪崩実験についてポスター発表を行いました。モニター付きの小型ビデオテープレコーダを持参し、実験の様子をビデオで紹介したところ、幸いにも多くの参加者に興味を持ってもらえたようです。

会期中の1日間同じ場所で、米国土木工学会主催の、吹雪と飛砂のモデリングに関する研究会が開かれました。ここでは、吹雪の力学の基礎的研究から建物周辺の吹き溜まりの予測等の応用的研究にわたり、12件の発表がありました。また、会期中に中村所長がAmerican Association of Avalanche Professionalsから表彰を受け、名誉会員に推挙されました。

本研究集会への参加にあたっては、参加を勧めて下さった新庄支所の東浦支所長をはじめ、長岡、新庄両支所の方々のお世話になりました。日本雪氷学会東北支部からは研究発表助成金をいただき、これを旅費の一部として充てさせていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

（新庄雪氷防災研究支所科学技術特別研究員 小杉健二）

集団研修「防災科学技術」が終了

今回で18回目を迎えたJICA集団研修「防災科学技術」は、開発途上国において実践的な防災科学技術に携わる技術者を対象に、本年9月5日に開始されて以来順調に進められ、計画されたカリキュラムをほぼ予定通り実施し、去る12月4日で総ての日程を終え、それぞれの国からの研修生（9名）から高い評価を受けました。